

特集

今だから読みたい 戦後文学

戦後文学

孤独者の栄光 小林勝 小論

鎌田慧

作家・ルポライター

小林勝 1958年



た作品である。これは朝鮮の山深い小さな町で暮らしている日本人の少年の視点から、その町にあるたった一台の自動車である、一九二七年型フォードに乗っている、トルコ人呉服商一家を題材にして、日本人と朝鮮人との関係について考察したものである。

町の唯一のこの「外国人家族」を、日本人たちは、やがてスパイ扱いして町から追いだしてしまう。少年はそのことにかすかな痛みをかんじている。

植民地で、日本人は、東京堂や近江屋、大阪屋、信濃、ニュー・イサハヤなど、出身地の地名をもちこんで、ひとかたまりになって暮らしている。ところが、トルコ一家は、朝鮮語を話し、朝鮮人と仲良くしていた。他国へ勝手に押しかけた日本人が結束して、外国人を追い出す。排外主義への批判が、小説の底を流れる。遠近法のきいた、メルヘンのような作品だが、作品のなかに植民地を故郷にもっている人間の悲しさが漂っている。

この作品は、芥川賞候補になったが、5カ月あとに発表された、「**拉拉屯**」は、朝鮮の山奥の町で教師をしている青年が、「満州」に去った元同僚の手紙を読む、という構成をとりながら、植民地への批判をさらに明確なものにしていく。

満州の日本企業の社員になった元同僚は、先輩につれられて、農民の土地を買収していく。先輩は、あるきながらこういった、と手紙には書かれている。

——この土地はな、おれの友達が生話してくれたんだ。奴もうまい汁を吸っていやがった、いやどうも、抜け目のない奴よ。奴はな、満人の百姓たちに阿片を売っているんだ。

——阿片ですって？とぼくは大きな声を出した。

——そうだ、阿片だ、と先輩はきっぱりと言った。満人どもはな、売れるものはみんな売ってでも阿片を吸いたがるんだ。しまいに土地しか残らなくなるとな、土地を売るのはよ。その土地を買うのよ、向こうは阿片が吸いたいだろう、だからうんと買いたたくのさ。おれの買土地なんか北下りだからな、普通よりうんと安くたいたいてくれたんだ。

それを聞いた元同僚は、先輩にたいして、「いいようなない憎悪」をかんじる。そのあと、いよいよ、中国人の百姓家に到着する。その家にはなにひとつめばしいものはなく、火の気などまるでなかった。先輩はこの家の主人である「疲れ切った表情の四十過ぎの男」と外へでていった。

「その時、入口から、ほとんど飛びこまればかりに、やせた二十歳前後の青年がはいって来てぼくにつき当たりそうになり、ふみとどまって向いあった。ぼくは思わず一歩うしろへさがった。粗末な着物をまとった彼の体は大変やせていたが、ぼくにはまるで彼の体全体のように思えたのだ。そして事実、まき

が燃えあがっていた。彼はぼくをじっとにらんでいた、それは息がつまるような幾秒かだった。彼はべつと唾を吐き、けものように身をひるがえして外へ駆け出して行った」

日本の植民者は、唾を吐きかけられた。戦後文学は、戦争についてはそれなりに豊かな作品群をもつことができたが、小林勝のように、被植民地人民の敵意を描くことはなかった。

翌57年2月号の「文学界」に発表された「日本人中学校」は、朝鮮の南部の町にあった中学校に赴任してきた英語教師の梅原健太の話である。彼はそれまでの不恰好でくすんでいる教員たちとはちがって、若くて、新鮮だった。たちまちにして、「学内の人気を一身に集めたかの感があった」。

が、しばらくして、「朝鮮人だ」との噂がたつようになる。酷薄な日本人生徒たちは、身边をかきまわり、崔という苗字であることをつきとめ、黒板に「講談 鴨緑江節 一龍崔貞山」とあてつけがましい落書きを遺し、崔の横に二重丸をくつつけておいた。

教室にはいつてきた梅原先生は、机を蹴倒し、黒板拭きを使わず、両手で激しい勢いで文字を消した。そのあと、黒板にむかっただま、両手をだらつときげて立っていた。

「ようやく彼は、低い、震える声で、こう言った。——僕が、君たちに、何かしたかね……」

教育に若い情熱をかたむけていた教

振り返られるべき思索の蓄積——過つた戦争で自分の身を焦かしたこの国で、文字と生き方を通して「別の戦後」を模索した文学者たち。その拠点であった雑誌「新日本文学」（廃刊）最後の編集長、鎌田慧氏が、戦後文学の典型を提示する。

「戦後文学」。社会変革を夢みた文学である。まっ先に想起起すのが、小林勝である。34年前の71年3月、43歳で早世した。いまは読まれること少なくなっている小説家だが、戦争と戦後革命、このふたつの激動の時代を、もつとも誠実に生きた、ひとりのナイーブな人間の記録として、その作品はもつと読まれていいはずである。

少年時代を朝鮮で支配者の子どもとして送り、陸軍士官学校に入って特攻隊員となり、戦後は共産党員として、火災瓶闘争に参加して逮捕される。けっきょく最高裁判決によって懲役一年の判決を得て下獄する。

小説家の一生を、作品について語るまえに経歴で語るのには邪道かもしれないが、小林勝の生涯とは、もつとも果敢で、かつ矛盾する価値観に引き裂かれた青春だった。彼の文学的な営為とは、それを反芻しつづけることだった。彼は戦後日本の出発とともに、小説を書きはじめたのだ。

小林勝の「フォード・一九二七年」は、56年5月号の「新日本文学」に発表され

員を、いたずらが追いだしたのだった。しかし、それは心ないなどとはけつていえない、確信的な差別的な攻撃だった。この小説では、主人公である五郎の父親は、巡査として設定されている。「万歳事件」（1919年3月1日の独立運動）が起きたとき、巡査である父親は朝鮮人の老人を射殺してしまう状況が書き込まれている。

植民者としての生活への批判

「万歳事件」については、「新日本文学」57年8月号に発表された「赤いはげ山」にも、「朝鮮の万歳事件の時の、朝鮮人虐殺の話を、習えた顔つきで話してくれた母親」との表現がある。日本人にとっては「事件」だったが、朝鮮人にとつては、抗日の大闘争だったのだ。

「日本人中学校」では、「昨日までとらえどころのないような無表情な顔で、卵や、野菜を売りに来ていた朝鮮人だった。いくら値切っても、にこにこ笑って値切られていた朝鮮人だった。それが今は血走った、鋭い眼つきで、万歳を叫んでいた」と書かれている。

三・一独立運動は、小林勝が生まれる8年もまえのことだから、伝聞でしか書けていない。この運動について、小林は「万歳・明治五二年」で書いているとのことだが、残念ながらわたしは未見である。

そのあとの「赤いはげ山」は、朝鮮人の少年との交流を描いた短編である。その少年・金谷徳は、主人公の童太と学業